

## お父さんお母さん

高田高等学校

菊川 七海

休日に家族で遠出ができる友人を本当に羨ましく思っている。友人から家族旅行のお土産をもらうと、ほとんど遠出ができない自分を再認識させられるようで、強く嫉妬する気持ちが芽生えてしまうのだ。

私の両親は産婦人科医だ。産婦人科は新たな命が誕生するお産をサポートするところで、いつ赤ちゃんが生まれるのかは医者であっても予測できない。たとえ世間は休日であろうとも、赤ちゃんはそんなことには関係な

く産まれてくる。急な患者さんが来ることもよくあるため、家族みんなが県外に出ることはほとんど無い。誰もが皆一度は行ったことがあるような、デイズニーランドも、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンも、私は一度も家族で行ったことがないのである。物心がついた時からずっと自由に外出できない生活を送っていた私は、両親の職業を恨んだ。もし父と母が別の仕事に就いていたなら私もみんなと同じように休日に外出できるのに。家族で遊びに行けるのに。私は、やり場のない嫉妬や悔しさを父と母にぶつけてしまうことがあった。両親はなんのために働いているのだろう、こう考えたことも少なくなない。

二年前の暑い夏の日だった。父と私以外だれもいないリビングで父に問われた。「七海は将来何になろうと思っとなの？」特に将来のことも決まっておらず返答に戸惑う私を見て、父はさらに続けた。「お父さんとお母さんの職業についてどう思う？」と。私は思

うままに答えた。休日も休めない上に夜も起こされることのある大変な仕事だから私はしたくない、と。傷つけてしまったのではないかと心配したが、父はどういうわけか声をあげて笑った。

「やっぱりそう見えてるよな、休みの日どこにも行けないもんな、でもお父さんたちの仕事はな……」それから父は自分の職業について話し始めた。産婦人科医は他の診療科とは少し違い、唯一患者さんに『おめでどう』と言うことができる医者であること。産婦人科医はやはり楽な仕事では無く、赤ちゃんとお母さん両方の命を背負って仕事をしている、だからこそやりがいがあること。「誰も出産で死んでしまうなんて思わんやろ。新しい命が産まれる現場が死と隣り合わせだってことをみんな知らん。いつだって赤ちゃんが元気に産まれてくるのが当たり前だと思つてるよな。お父さんはその普通を一生懸命守つてるんや」こう語る父の姿はどこか誇らし

げで、いつものおちやらけている父からは想像できないほど、とてもかっこよく見えた。

私の母は、私を産んですぐに仕事に復帰した。父と母の夜勤の日が被った日は、私が夜中一人になることもあり、心配した両親は私を祖父母の元へ預けることが多かった。アンパンマンを見たこと、貝堀に行ったこと、ペットショップに動物を見に行ったこと、今思い出せる幼い頃の記憶は常に祖父母と共にあり、両親とした事がほとんど思い出せないほどだ。私は、母は私より仕事を優先したのだと思ひ込んでいた。少し大袈裟に言えば、私のことを大切に思っていないんだろう、そう思っていた。ある日、部屋を片付けようと思つた私はいつもなら目にもつかない、自分の身長よりも遥かに高い棚に手を伸ばした。そこには、たくさんのアルバムと何冊もの古びたノートがあつた。アルバムを手に取つてみると、そこには確かに幼い顔をした私が写っていた。夜ご飯を食べているとき、公園で

遊んでいる時、父の膝に乗っている時、テレビを見ている時。何気ない日常を写した写真の数々はアルバムに綺麗に貼られていて、撮る必要があるのかもわからないような写真も多かった。日記には、その日の食事、体温、出来事、できることになったことなど私の日々の生活が、三六五日、一日も欠かすことなく本当に細かく書かれていた。私が祖父母の元へ預けられているはずの時も。どうということなのか祖母に聞いてみると、祖母は笑って、「お母さんは毎日、七海の様子を聞くために電話をかけてきていたよ」と言った。夜勤は忙しく、空き時間はほとんどないはずなのに、少し時間を見つけると電話をしていたそうだ。本当は自分の目でずっと見守りたかった。しかし働くことで生まれる命がある。母は、私の母であることと同時に、新たな命の誕生を支える医師であっただけだった。母が私を見守ることと仕事をすることを天秤に掛けた訳がなかったのだ。自分の仕事に誇

りと責任を持ち、その職務を全うしていた母は、私の母親としても私と真剣に向き合ってくれていたのだ。

ここまで書いて、私の両親はなんて素敵な仕事をしているのだろうと思った。人がこの世に誕生する、そんな尊い現場で毎日懸命に働き、多くの患者さんから「ありがとう」と言われている父と母を本当に誇りに思う。普段は照れ臭くて言えないからこの場を借りて言おうと思う。お父さん、お母さん、いつもありがとう。

(三重県伊勢市)